

17 華岡青洲の「春林軒」入門者について

——とくに文化二年度の入門者0人の謎——

松 木 明 知

華岡青洲の「春林軒」に入門した門人の数は非常に多くを数え、大阪の緒方洪庵の「適塾」と並び称される。

大都會でもない紀州の平山にこのように多くの門人が蟠集したのは何といつても、青洲の開発した麻沸湯(通仙散)による全身麻酔下の手術に原因を求めざるを得ない。すなわち当時だれもがなし得なかった手術を行った青洲の許で勉強し、最先端の医師を身につけようと考えて若い医師たちが全国から集まったのである。

事実、森慶三らは「青洲塾入門人員年次別一覧」の中で(森ら・「医聖華岡青洲」、南ら・「華岡青洲」)は「春林軒」の入門者を年次別に集計し、全身麻酔下の手術が成功する文化元年以前の十年間の入門者は三十五人、成功後文

化三年(一八〇六)以後の十年間の入門者は二八四名と約八倍に増加したと述べている。尤も森らは最初の全身麻酔成功の年を旧説の文化二年(一八〇五)としているが、論旨において誤りはない。

しかし最初の全身麻酔下の手術が行われた文化元年(一八〇四)前後の入門者の数は、呉の収載した門人帳(真秀三『華岡青洲先生及其外科』)によれば享和元年(一八〇一)二人、二年(一八〇二)が二人、三年(一八〇三)が七人、文化元年(一八〇四)九人、二年(一八〇五)0人、三年(一八〇六)一人、四年(一八〇七)四人、五年(一八〇八)九人、六年(一八〇九)二十五人、七年(一八一〇)十四人となっている。文化二年は全身麻酔下の手術が成功した翌年であり、本来ならば入門者が多くなっても良いと思われるが、実際には0人であった。

青洲存命中に入門者が0人であったのは、寛政四年(一七九二)、同十二年(一八〇〇)と文化二年(一八〇五)の三回だけである。寛政四年と十二年の場合は、麻沸湯による全身麻酔下の手術の成功以前であるから入門者が0人であっても、何ら不思議ではない。しかし文化元年後

の二年の入門者0人は理解に苦しむ。

演者は何故文化二年の入門者が0人であったかという謎について一つの結論を得たので発表したい。

(弘前大学医学部麻酔科)

18 河口良庵著『寛文十庚戌歲)阿蘭陀語』

本に就いて

川 島 恂 二

本書は最近入手したが、京都から出た本の由である。題名「阿蘭陀語」と書いてあるが、文学書的部分は帖末に数頁あるのみで、実は阿蘭陀薬物名を片仮名で書き、その片仮名書き単語の下欄に邦語訳名が書いてある形式の単語集という訳である。イロハ順分類。

本の形態は紺色の横版綴じ本で、和紙三四頁中の二四頁が薬物単語篇、七頁が日常日本語のオランダ語の和訳単語集である。この単語部は単語篇、動詞篇、助動詞篇などから成り、極く初期の和蘭語記憶帖であって辞書の極めて前段階の日常便利帖に過ぎない。最後の四頁に、河口良庵・春益師が一番弟子の川口良閑(古河の河口家祖)にこの帖と、秘伝和蘭陀外科要訣全書を与えた理由が記